

アイスランド語とフェーロー語の否定表現の概要

入江浩司

1. はじめに*

本稿の目的は現代アイスランド語とフェーロー語¹の否定表現の概要を、パラレルテキストに現れる例を用いて示すことである。共同研究における他言語との対照を目的とするため²、パラレルテキストとしてサンテグジュペリ『星の王子さま』(*Le petit prince*)の翻訳を用いる。

本稿の構成は次の通りである。まず第2節で、本稿における否定表現の分類の枠組みとして用いる van der Auwera & Krasnoukhova (2020) による分類を示す。続く第3節で、『星の王子さま』のアイスランド語訳およびフェーロー語訳から第2節に挙げる分類に沿って否定表現の例を挙げる。第4節はまとめと考察である。

2. 先行研究

本稿では次に挙げる van der Auwera & Krasnoukhova (2020) による否定表現の分類に基づいて、第3節でアイスランド語とフェーロー語の例を示す。(1) と (2) の英語によるサンプルの文も van der Auwera & Krasnoukhova (2020) からの引用である。

I. 標準的否定 (standard negation)

(1) Mary does *not* love him [standard negation 標準的否定]

II. 非標準的否定 (non-standard negation)

- (2) a. Mary *does not* love him *at all* [emphatic negation 否定の強調]
b. Mary *does not* live here *yet* [phasal negation 局面の否定]
c. I urge you *not* to talk to him [subordinate negation 従属節の否定]
d. *Doesn't* Mary love John? [interrogative negation 否定の疑問]
e. *Don't* listen to him [imperative negation 否定の命令]
f. Fred is *not* a teacher [ascriptive negation 帰属性の否定]
g. Tere are *no* blue tigers [existential negation 存在の否定]
h. There are *no* blue tigers in France [locational negation 存在場所の否定]
i. *Nobody* believes him [negation of indefinites 不定代名詞による否定]

- j. *No!* [prosentential negation 否定の文代用形]
 k. *Mary disagrees with me* [derivational negation 派生による否定]
 l. *He was without money* [privative negation 欠如的否定]
 m. *Don't be surprised if it doesn't rain* [expletive negation 虚辞的否定]

(meaning 'Don't be surprised if it rains', Horn 2010: 124)

(van der Auwera & Krasnoukhova 2020: 91-92)

van der Auwera & Krasnoukhova (2020: 91) によると、標準的否定 (standard negation) とは、(1) のように平叙の主節内の語彙的な主動詞を、特に強調することなく否定するものであり、(2) に例示されるそれ以外の否定の機能はすべて非標準的否定 (non-standard negation) と総称される。なお、van der Auwera & Krasnoukhova (2020: 92) も述べているように、(2) k, l, m の斜字体の語句を含む節は「否定」ではないが、問題となる述部が含む否定的な意味合いを考慮してここに含めている。

3. アイスランド語とフェーロー語の例

この節では、先の節で挙げた否定表現の分類の順序に沿ってアイスランド語とフェーロー語の例文を『星の王子さま』の翻訳から示す(アイスランド語訳: Þórarinn Björnsson, trans. 2017 [1961], フェーロー語訳: Alexandur Kristiansen, trans. 2015)。例文の提示において、アイスランド語は [IS xx]、フェーロー語は [FO xx] のように、言語名の略号にそれぞれの例が現れる訳本のページ番号を添えて記す。両言語のグロスは英語で付すが、自然な英語訳を意図したものではなく、原文の逐語的理解の補助としてのものであり、文全体の解釈として日本語訳をつける。両言語でほぼ同じ翻訳になっている場合は日本語訳は一つとし、訳し方の違いがある場合はそれぞれの言語に日本語訳をつける。

3.1. 標準的否定 (standard negation)

両言語で、平叙文の否定は定動詞の直後に否定の副詞 *IS ekki* / *FO ikki* を置くのが文全体の否定として最も一般的な表現である。動詞の活用等に肯定と否定で違いはない。(3) は自動詞文の否定、(4) は他動詞文の否定である。

(3)[IS 25] *En litli prinsinn svaraði ekki.*

but little prince.DEF.NOM answered.3SG not

「しかし、小さい王子は答えなかった。」

[FO 22] *Men tann litli prinsurin svaraði ikki.*

but the little prince.DEF.NOM answered.3SG not

(4)[IS 13] *ég teikna ekki flugvélina, það er of flókin teikning fyrir mig*
 I draw.1SG not airplane.DEF.ACC it is too complicated drawing for me.ACC
 「僕は飛行機を描かない、それは僕にとってあまりに複雑な描画だ。」

[FO 11] *eg fari kortini ekki tekna eitt flogfar, tað er alt ov flækjastligt fyrir meg for me.ACC*
 I will.1SG nonetheless not draw.INF an airplane.ACC it is all too complicated
 「でも僕は飛行機を描いたりしないだろう、それは僕にはあまりに複雑すぎる。」

(4) FO は助動詞があるため、本動詞（不定詞）の前に否定辞が現れている。他動詞文で目的語が代名詞の場合は両言語で、目的語の代名詞の後に否定の副詞が現れる傾向にある（(5) IS）。ただし、代名詞に従属節が続く場合は代名詞の前に否定の副詞が現れる（(5) FO）。

(5)[IS 26] *Ég trúi þér ekki!*
 I.NOM believe.1SG you.DAT not
 「僕は君を信じないよ！」

[FO 22] *Eg trúgvi ekki tí, tú sigur!*
 I.NOM believe.1SG not it.DAT you.NOM say.2SG
 「僕は君の言うことを信じないよ！」

両言語とも標準的否定の文とそれに対応する肯定文の構造は、否定の副詞の有無のみが異なり、動詞の活用等で異なる点がないため、対称的 (symmetric) と言える（肯定文と否定文の "symmetry" と "asymmetry" については van der Auwera & Krasnoukhova 2020: 100-102 を参照）。

3.2. 非標準的否定 (non-standard negation)

この節では (2) の分類に沿って、非標準的否定の例をアイスランド語、フェーロー語の順に挙げる。

3.2.1. 否定の強調 (emphatic negation)

標準的否定を強調する場合 ((2) a. *Mary does not love him at all*)、両言語とも通常の否定の副詞 IS *ekki* / FO *ikki* の前に程度を強める副詞 IS *alls* / FO *als* を置いて表現する。

(6)[IS 70] *Þið eruð alls ekki líkar minni rós, þið eruð ekkert ennþá, sagði hann við þær.*
 you.PL.NOM are.2PL at.all not like.PL.NOM my rose.SG.DAT you are nothing
 still said.3SG he.NOM to them.F.ACC

「君たちは僕のバラに全然似ていない、君たちはまだ何ものでもない、と彼は彼女たち（バラたち）に言った。」

[FO 65] *Tit likjast als ikki mínari rósu, tit eru slettis einki, segði hann við þær.*
you.PL.NOM resemble.2PL at.all not my rose.SG.DAT you are at.all nothing
said.3SG he.NOM to them.F.ACC

「君たちは僕のバラに全然似ていない、君たちはまったく何ものでもない、と彼は彼女たち（バラたち）に言った。」

アイスランド語の (6) IS では形容詞述語 (*eruð líkar* 「似ている」) の否定で、フェーロー語の (6) FO では動詞述語 (*likjast* 「似ている」) の否定となっている。なお、フェーロー語の例の後半で、否定の不定代名詞 *einki* 「何も～ない」 (*eingin* の中性単数主格形、3.2.9 参照) の強調として *slettis* (*slættis*) という副詞も現れている。

また、両言語とも、否定の副詞 IS *ekki* / FO *ikki* と不定代名詞 IS *neinn* / FO *nakar* (性・数・格による変化あり) の組み合わせで否定の強調をすることができる。

(7) [IS 31] *Ég skildi þá ekki neitt!*
I.NOM understood at.that.time not anything.N.SG.ACC

「僕はあの時、何も理解していなかった！」

[FO 29] *Tá hevði eg ikki lært at skilja nakað.*
at.that.time had I.NOM not learned to understand anything.N.SG.ACC

「あの時、僕は何も理解できていなかった。」

3.2.2. 局面の否定 (phasal negation)

ここでは「まだ～ない」という局面の否定 ((2) b. *Mary does not live here yet*) の表現を挙げる。両言語とも、否定の副詞と *enn* 「まだ」という副詞を加えることによって文が構成される。

(8) [IS 38] *Ég hefði enn ekki farið um allt konungsríkið.*
I have yet not gone around all kingdom.DEF

「私はまだ王国を隅々まで巡ったことがない。」

[FO 36] *Enn havi eg ongantið verið runt í øllum ríki mínum.*
yet have I never been around in all kingdom my.

「私はまだ自分の王国を隅々まで巡ったことが一度もない。」

「一度も～ない」という否定には、IS *aldrei* / FO *ongantið* という否定の副詞を、標準的な否定の副詞 IS *ekki* / FO *ikki* の代わりに用いる ((8) FO にもこの副詞が現れている)。こ

れは否定の強調と見るべきかもしれないが、例 (9) で完了形を用いた経験を表す文脈の中で用いられているため、ここで示しておく。

(9)[IS 27] *Hann hefir aldrei fundið ilm af blómi. Hann hefir aldrei horft á stjörnu.*

he has never found aroma of flower he has never looked at star

「その人は花の香りを嗅いだこともなく、星を見たこともなかった。」

[FO 23] *Hann hefur ongantið luktað at eini blómu. Hann hefur ongantið hugt at*

he has never smelled at a flower he has never looked at

eini stjörnu.

a star

3.2.3. 従属節の否定 (subordinate negation)

従属節の否定として van der Auwera & Krasnoukhova (2020: 91) が挙げるのは (2) c. I urge you *not* to talk to him という、主節の動詞がとる to 不定詞句を否定する例であり、これに合わせてアイスランド語の不定詞句に否定辞が現れる例を挙げておく (フェーロー語の対応箇所はこれと異なる構文で翻訳され、否定辞は現れていない)。

(10) [IS 62] *ef það sæi þetta . . . það mundi hósta óskaplega og látaast vera*

if it saw.3SG.SBJV this it would cough terribly and pretend be.INF

að deyja til þess að verða ekki hlægilegt.

to die so that to become not laughable

「もしそれ (花) がこれを見たら……ひどく咳をして、笑いものにならないように、死にそうなるふりをするだろう。」

主節と従属節とで否定辞が異なるといったことは、アイスランド語でもフェーロー語でもない。『星の王子さま』の翻訳で、(11) のように、アイスランド語訳では従属節の否定になっているのに対し、フェーロー語の翻訳では主節の否定になっている例が一か所ある。

(11) [IS 32] *Hann hélt hann ætti aldrei eftir að koma aftur.*

he thought he had.SBJV never behind to come again

「彼は自分はまだ二度と戻ってくることはないだろうと思った。」

[FO 30] *Hann væntaði ikki, at hann nakrantið fór at koma aftur.*

he expected not that he ever went to come again

「彼は自分が再び戻ってくると思わなかった。」

アイスランド語でもフェーロー語でも、英語などと同様に、思考や推測を表す動詞が主節に現れる際に、否定が主節で行われるか従属節で行われるかの揺れがあるが、その傾向に両言語での違いがあるかどうかに関しては未調査である。なお、フランス語原文は (12) の

ように動詞 *croire* の補部の不定詞を否定する形になっている。

(12) [FR 27] *Il croyait ne plus jamais devoir revenir.*

3.2.4. 否定の疑問 (interrogative negation)

アイスランド語でもフェーロー語でも、原則として対応する平叙文の主節の動詞を文頭位置（接続詞はカウントしない）に置くことで *yes-no* 疑問文を形成することができ、否定の疑問文（(2) d. *Doesn't Mary love John?*）も同様にして形成され、否定辞の種類等に平叙と疑問で違いはない。

(13) [IS 72] *Voru þeir ekki ánægðir þar sem þeir voru?*

were they not satisfied there where they were

「あの人たちは自分たちがいた場所で満足できなかったの？」

[FO 68] *Men dámdi teimum ikki at vera har, sum tey vóru?*

but liked.3SG them.DAT not to be there where they were

「でもあの人たちは自分たちがいた場所にいることが気に入らなかったの？」

3.2.5. 否定の命令 (imperative negation)

英語の (2) e. *Don't listen to him* のような 2 人称単数の相手に対する命令は、アイスランド語では〈動詞語幹+2 人称単数代名詞主格〉（ここではハイフンで区切って示すが、正書法では 1 語のように書かれる）、フェーロー語では動詞語幹のみで表現され、否定の命令はそれに否定の副詞を添える。

(14) [IS 38] *Far-ðu ekki, svaraði konungur [...]*

go-you not answered king

「去らないでくれ、と王様は答えた」

[FO 36] *Far ikki, segði kongurinn, [...]*

go not said king.DEF

「去らないでくれ、と王様は言った」

なお、van der Auwera & Krasnoukhova (2020: 106-108) によると、否定の禁止表現について、(i) 動詞が肯定の命令と同じ形式かどうか、(ii) 否定辞が標準的否定と同じ形式かどうか、の組み合わせによって諸言語を 4 つの類型に分類することが提案されている。アイスランド語の禁止表現では、動詞は肯定の命令と同じ形式が使われ、否定辞も標準的否定と同じ形式が使われる。

アイスランド語では進行形の否定による禁止表現が頻繁に使用される。進行形は〈*vera* + *að* 不定詞 [*'be' + 'to* 不定詞]〉で表され、その否定は、発話時に相手がしている行為の禁止を表す。フェーロー語にもこの進行形はあるにはあるが、(肯定文でも) あまり使用され

ない。(15) のアイスランド語訳に対応する箇所の特徴ロー語訳は *Statt nú ekki har og ...* 'stand now not there and ...' 「そこに立っていないで……」という普通の否定命令文で、進行形は使われていない。

(15) [IS 34] *Ver-tu ekki að slóra þetta, það er alveg óþolandi.*
be-you not to loaf.around this it is completely intolerable
「ぐずぐずしないで、本当にイライラする。」

3.2.6. 帰属性の否定 (ascriptive negation)

英語の (2) f. Fred is *not* a teacher のように可算名詞の単数形で帰属性の否定をする場合、アイスランド語では否定の副詞 *ekki* を添え、特徴ロー語では否定の副詞 *ikki* と不定冠詞で表現する (アイスランド語には不定冠詞はない)。

(16) [IS 12] *Þú sérð... þetta er ekki kind, þetta er hrútur.*
you see this is not lamb this is ram
「君はわかるかい……これは子羊じゃなくて、これは雄羊だ。」
[FO 10] *Dugir tú ekki at síggja... at hatta er ekki eitt lamb, hatta er ein veðrur.*
able you not to see that this is not a lamb this is a ram
「君はわからないかい……これは子羊じゃなくて、雄羊だ。」

また、アイスランド語では否定の不定代名詞 *enginn* (性・数・格による変化あり) を形容詞的に用いた否定、特徴ロー語では否定の副詞 *ikki* と不定代名詞 *nakar* (性・数・格による変化あり) の組み合わせによる帰属性の否定表現がある。

(17) [IS 56] *Jörðin er enginn hversdagslegur hnöttur.*
earth.DEF is no everyday globe
「地球はありふれた星ではない。」
[FO 52] *Jörðin er ekki nokur heilt vanlig gongustjörna.*
earth.DEF is not any quite usual planet
「地球はまったく普通の星ではない。」

3.2.7. 存在の否定 (existential negation)

英語の (2) g. There are *no* blue tigers のような存在の否定は、アイスランド語でも特徴ロー語でも否定の不定代名詞 IS *enginn* / FO *eingin* (性・数・格による変化あり) を名詞に添えて表現される。『星の王子さま』の翻訳では、存在の否定を表す文はすべて場所を表す句を伴っているため (3.2.8 で扱う)、ここは英語の (2) g に対応する作例で示す。

(18)[IS 作例] *Það eru engin blá tígrisdýr.*
 it are no blue tigers.N.NOM.PL
 「青いトラはいない。」

[FO 作例] *Her eru eingir bláir tigarar.*
 there are no blue tigers.M.NOM.PL

3.2.8. 存在場所の否定 (locational negation)

アイスランド語でもフェーロー語でも、英語の (2) h. *There are no blue tigers in France* のような存在場所の否定を表す文は、基本的に 3.2.7 で述べた存在の否定を表す文に場所を表す句を加えたものである。

(19)[IS 30] *Það eru engin tígrisdýr á mínum hnetti, [...]*
 it are no tigers.N.NOM.PL on my globe.DAT
 「僕の星にはトラはいないよ」

[FO 27] *Her eru eingir tigarar á stjörnuni hjá mær, [...]*
 there are no tigers.M.NOM.PL on star.DAT by me.DAT

3.2.9. 不定代名詞による否定 (negation of indefinites)

アイスランド語でもフェーロー語でも、英語の (2) i. *Nobody believes him* と同様に、否定の不定代名詞 IS *enginn* / FO *eingin* (性・数・格による変化あり) のみで否定文を形成することができる。(20) はこの代名詞が主語の位置で用いられている例(両言語とも男性単数主格形)で、(21) は動詞の目的語の位置で用いられている例(両言語とも中性単数対格形)である。

(20)[IS 31] *En enginn trúði honum vegna klæðnaðar hans.*
 but nobody.M.SG.NOM trusted him.DAT because.of clothing he.GEN
 「だけど彼の服装のため、誰も彼を信用しなかった。」

[FO 29] *Men eingin trúði honum, tí hann var so vesaliga ílatin.*
 but nobody.M.SG.NOM trusted him.DAT because he was so miserably dressed
 「だけどひどくみすぼらしい服を着ていたため、誰も彼を信用しなかった。」

(21)[IS 45] *Konungar eiga ekkert. Þeir „ríkja“.*
 kings.NOM possess.3PL nothing.N.SG.ACC they.NOM reign.3PL
 「王様たちは何も所有しない。彼らは『支配』するんだ。」

[FO 42] *Kongar eiga einki. Teir ráða yvir.*
 kings.NOM possess.3PL nothing.N.SG.ACC they.NOM rule.3PL over

(20) と (21) は否定の不定代名詞が単独で名詞的に使用されている例であるが、どちらの言語でも、この代名詞は付加語的形容詞のように使用することができる。今回使用した翻訳では両言語で平行的な例がないため、それぞれ別の箇所から例を引用する。

(22) [IS 28] *Þau tóku ekkert rúm og voru ekki fyrir neinum.*
they.NOM took.3PL no space.N.SG.ACC and were not in.front.of nothing.PL.DAT
「それら（の花）は少しも場所を取らなかったし、何の邪魔もしなかった。」

(23) [FO 56] *Tey hava ongar røtur, tað man vera ógvuliga ófýsiligt*
they.NOM have no root.F.PL.ACC it will be extremely uncomfortable
fýri tey.
for them.ACC
「彼ら（人間たち）には根がなく、それは彼らにとって大変困ったことだろう。」

否定の不定代名詞は形の上では文の構成素の否定であるが、意味的には文全体の否定であり、van der Auwera & Krasnoukhova (2020: 110) も述べているように、標準的な否定辞が現れないことを別にすれば「標準的否定」とみなすこともできる。

また両言語とも、否定の副詞とともに動詞や前置詞の目的語に否定極性要素としての不定代名詞 IS *neinn* / FO *nakar*（性・数・格による変化あり）を置くことで、否定の強調をすることができる（先に挙げた (7) も同様）。

(24) [IS 27] *Hann hefir aldrei elskað neinn.*
he.NOM has never loved anybody.M.SG.ACC
「彼は誰も愛したことがない。」

[FO 23] *Hann hefur ongantið verið góður við nakran.*
he.NOM has never been good with anybody.M.SG.ACC
「彼は誰も好きになったことがない。」

(25) [IS 26] *Þyrnarnir, þeir eru ekki til neins.*
thorns.DEF they are not for anything.N.SG.GEN
「棘なんて、何の役にも立たない。」

[FO 22] *Tornir eru ikki til nakra nytu.*
thorns are not for any use.F.SG.ACC
「棘は何の役にも立たない。」

3.2.10. 否定の文代用形 (prosentential negation)

アイスランド語でもフェーロー語でも、否定の文代用形として英語の (2) *No!* に相当する応答の間投詞（副詞）がある。

(26)[IS 26] *Nei, nei! Ég held ekki neitt.*
 no no I.NOM think not anything.N.SG.ACC
 「違う、違う！ 僕は何とも思っていないよ。」

[FO 23] *Nei! Nei! Nei! Eg sigi einki.*
 no no no I.NOM say nothing.N.SG.ACC
 「違う！ 違う！ 違う！ 僕は何とも言わないよ。」

3.2.11. 派生による否定 (derivational negation)

アイスランドでもフェーロー語でも、否定の派生接辞として最も生産性が高いのは接頭辞 *ó-* (英語 *un-* に対応) である。まず英語 (2) k. *Mary disagrees with me* のように、動詞に否定の接頭辞がついた例を挙げる。(27) はアイスランド語の動詞 *ónáða* 「煩わせる」の例で、*náð* 「静穏、休息」という名詞からの派生である。(28) はフェーロー語の動詞 *ómaka* 「煩わせる」の例で、*mak* 「静けさ、静穏」という名詞からの派生である。この否定接頭辞をもつ動詞が両言語で平行して使用されている箇所がないため、それぞれ別の箇所から引用する。

(27)[IS 18] *En ef þú segir við það [:...] mun það sannfærast og ekki ónáða þig*
 but if you say to it will it be.convinced and not disturb you.ACC
með neinum spurningum.
 with any questions.DAT
 「だがもし君が彼ら (大人たち) に……と言うなら、彼らは納得して君を質問で煩わせたりしないだろう。」

(28)[FO 37] *Men nú var tann lítli prinsurinn liðugur við sínar fyrireikingar og*
 but now was the little prince.DEF finished with his.own preparation and
vildi ekki ómaka konginn meira.
 wished not disturb king.DEF.ACC more
 「だが小さい王子はもう支度を終えており、それ以上王様を煩わせたくなかった。」

否定の接頭辞 *ó-* は形容詞の接頭辞として最も頻繁に現れる。(29) は、IS *sýnilegur* / FO *sjónligur* 「目に見える」にこの接頭辞がついた形容詞の例である。

(29)[IS 70] *Það mikilvægasta er ósýnilegt augunum.*
 the most.important is invisible eyes.DEF.PL.DAT
 「最も大切なものは目には見えない。」

[FO 67] *Tað avgerandi er ósjónligt fyri eyganum.*

the crucial is invisible for eye.DEF.SG.DAT

「決定的なものは目には見えない。」

3.2.12. 欠如的否定 (privative negation)

英語の (2) 1. He was *without* money のような欠如的否定を表す前置詞として、アイスランド語には *án* (属格支配)、フェーロー語には *uttan* (対格支配) がある。

(30) [IS 80] *Og enn, án þess að vita af hverju, varð ég undarlega sorgbitinn.*

and again without it.GEN to know of what became I oddly mournful

「そして再び、なぜだかわからないが、僕は奇妙に悲しくなった。」

[FO 75] *Og aftur kendi eg meg, uttan at vita hví, so merkiliga*

and again felt I.NOM me.ACC without to know why so strangely

innantóman, [. . .]

empty.M.SG.ACC

「そして再び、なぜだかわからないが、僕は自分がとても奇妙な具合に虚ろであるのを感じた。」

アイスランド語とフェーロー語には、英語の *-less* に対応する欠如的な意味を表す形容詞の派生接尾辞があり (IS *-laus* / FO *-leysur*)、派生の形態ということでは 3.2.11 に含めるべきかもしれないが、意味の面を考慮して、ここで例を挙げておく。(31) の例において、この接尾辞をもつ形容詞 (IS *miskunnarlaus* / FO *miskunnleysur* 「容赦のない」) が、アイスランド語では中性単数形の副詞的用法で現れ、フェーロー語は男性単数主格形で *hann* 「彼」と一致している。

(31) [IS 26] *En hann hélt áfram, miskunnarlaust:*

but he.NOM held forward merciless.N.SG.ACC

「しかし彼は情け容赦なく続けた：」

[FO 23] *Men hann legði aftrat miskunnleysur:*

but he.NOM put further merciless.M.SG.NOM

「しかし彼は容赦なく付け加えた：」

3.2.13. 虚辞的否定 (expletive negation)

英語の (2) m. Don't be surprised if it *doesn't* rain のように虚辞的に使われる否定辞は、今回検討したアイスランド語の翻訳でもフェーロー語の翻訳でも見られなかった。しかし Jin and Koenig (2021) が指摘するように、たとえ文法書に書かれていなくても実際には虚辞的な否定辞が使用されている言語は多く、アイスランド語とフェーロー語についても今後さ

らに調査が必要である。

4. まとめと考察

第3節で概観したアイスランド語フェーロー語の否定の方略について整理すると表1のようになる。アイスランド語とフェーロー語の否定の方略は大部分が平行的である。標準的否定 (standard negation) は両言語とも肯定の節に否定の副詞を加えることで形成される。非標準的否定 (non-standard negation) のうち、a. 否定の強調 (emphatic negation)、b. 局面の否定 (phasal negation)、c. 従属節の否定 (subordinate negation)、d. 否定の疑問 (interrogative negation)、e. 否定の命令 (imperative negation) において、両言語とも基本的に標準的否定と同じ方略が使われる。なお、進行形をもつアイスランド語では e. 否定の命令においても進行形が頻繁に使用され、この点はフェーロー語と異なる。

非標準的否定のうち、g. 存在の否定 (existential negation)、h. 存在場所の否定 (locational negation)、i. 不定代名詞による否定 (negation of indefinite) については、両言語で否定の不定代名詞が使用される。なお、否定の不定代名詞は否定の副詞と共起しない。

両言語の違いが目立つのは f. 帰属性の否定 (ascriptive negation) である。そのうち i. は両言語とも標準的な否定の副詞と名詞の組み合わせであるが、そもそも不定冠詞をもたないアイスランド語では名詞に冠詞はつかず、フェーロー語では不定冠詞がつく。帰属性の否定の ii. では、アイスランド語は否定の不定代名詞を用いる方略であるのに対し、フェーロー語は標準的な否定の副詞と不定代名詞 *nakar* の組み合わせで表現され、この点が両言語で最も大きな違いとなっている。

その他の否定については両言語で大きな違いがなく、i. 否定の文代用形 (prosentential negation) としては両言語で同根の間投詞が使用され、k. 派生による否定 (derivational negation) についても両言語で同根の接頭辞が使われる。l. 欠如的否定 (privative negation) についても、両言語とも前置詞による方略と、同根の接尾辞による方略をもつ。虚辞的否定 (expletive negation) は、今回検討したテキストでは現れていなかったが、さらなる調査が必要である。

表 1 アイスランド語とフェーロー語の否定の方略一覧

	アイスランド語	フェーロー語
I. 標準的否定 (3.1)	否定の副詞 ekki による	否定の副詞 ikki による
II. 非標準的否定 (3.2)		
a. 否定の強調 (3.2.1)	alls 「全く」 + ekki	als 「全く」 + ikki
b. 局面の否定 (3.2.2)	否定の副詞 + enn 「まだ」	否定の副詞 + enn 「まだ」
c. 従属節の否定 (3.2.3)	標準的否定と同様	標準的否定と同様
d. 否定の疑問 (3.2.4)	標準的否定と同様	標準的否定と同様
e. 否定の命令 (3.2.5)	標準的否定と同様 (進行形も頻繁に現れる)	標準的否定と同様
f. 帰属性の否定 (3.2.6)	i. ekki + 名詞 ii. 否定の不定代名詞 enginn	i. ikki + 不定冠詞つき名詞 ii. ikki + 不定代名詞 nakar
g. 存在の否定 (3.2.7)	否定の不定代名詞 enginn	否定の不定代名詞 eingin
h. 存在場所の否定 (3.2.8)	否定の不定代名詞 enginn	否定の不定代名詞 eingin
i. 不定代名詞による否定 (3.2.9)	否定の不定代名詞 enginn	否定の不定代名詞 eingin
j. 否定の文代用形 (3.2.10)	間投詞 nei による	間投詞 nei による
k. 派生による否定 (3.2.11)	接頭辞 ó- (動詞・形容詞に添加)	接頭辞 ó- (動詞・形容詞に添加)
l. 欠如的否定 (3.2.12)	i. 前置詞 án + 名詞 ii. 接尾辞 -laus (出名形容詞)	i. 前置詞 uttan + 名詞 ii. 接尾辞 -leysur (出名形容詞)
m. 虚辞的否定 (3.2.13)	なし (?)	なし (?)

<注>

* 本研究は JSPS 科研費 JP21K00477, JP22K00503 の助成を受けたものである。

1 両言語はいずれもインド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派の言語である。アイスランド語はアイスランド共和国の公用語で、母語話者数は 33 万人程度。フェーロー語はデンマーク領フェーロー諸島で話されている言語で、母語話者数は 7 万人弱。両言語とも、名詞類には形態論的な格として主格・対格・与格・属格の区別があり (ただし、フェーロー語では属格が衰退しつつある)、名詞には接尾辞定冠詞のついた形 (グロスで DEF と表示する) と、つかない形がある。フェーロー語では不定冠詞が発達しているが、アイスランド語には不定冠詞はない。両言語とも、動詞の単純時制としては現在と過去の区別がある。

- 2 JSPS 科研費 JP21K00477, 研究課題「微視的類型論・機能主義的観点によるバルト海周辺諸語の否定の地域言語学的研究」による。

<略号>

1	1 人称 (1st person)	INF	不定詞 (infinitive)
2	2 人称 (2nd person)	M	男性 (masculine)
3	3 人称 (3rd person)	N	中性 (neuter)
DAT	与格 (dative)	NOM	主格 (nominative)
DEF	定 (definite)	PL	複数 (plural)
F	女性 (feminine)	SBJV	接続法 (subjunctive)
GEN	属格 (genitive)	SG	単数 (singular)

<引用テキスト> (角括弧内は本稿での略号)

Saint-Exupéry, Antoine de (1971) *Le petit prince*. Boston: Mariner Books. [FR]

Saint-Exupéry, Antoine de (2015) *Tann lítli prinsurin* (Alexandur Kristiansen, trans.). Fuglafjörður: Egið forlag (2nd edition, 2nd printing). [FO] (フェーロー語訳)

Saint-Exupéry, Antoine de (2017) *Litli prinsinn* (Þórarinn Björnsson, trans.). Reykjavík: Mál og menning (originally published by Bókaútgáfa Menningarsjóðs 1961). [IS] (アイスランド語訳)

<参考文献>

Horn, Laurence R. (2010) Multiple negation in English and other languages. In: Laurence R. Horn (ed.) *The expression of negation*. 111-148. Berlin: De Gruyter Mouton.

Jin, Yanwei and Jean-Pierre Koenig (2021) A cross-linguistic study of expletive negation. *Linguistic Typology* 25(1): 39-78.

van der Auwera & Krasnoukhova (2020) The typology of negation. In: Viviane Déprez & M. Teresa Espinal (eds.) *The Oxford Handbook of Negation*. 91-116. Oxford: Oxford University Press.